

どんぐり遊び 学校法人 菅原学園 江戸川双葉幼稚園（東京都）

魂の躍動する園生活を求めて

子どもは、**好奇心の塊**。見たがり屋で、知りたがり屋で、やってみたがり屋で、絶えずアンテナを張り巡らし、「おもしろいこと」を探している。そして、**それが、子どもたちの知を拓く**。けれども、現代の都会では、子どもたちが、その「おもしろいこと」に出会える機会や場がめっきり遠のいてしまっている。天候の変化や、季節の変化さえ感じることもできない環境が、子どもたちを取り巻いているのである。

そうであれば、子どもたちが、「わー、すごい！」「きれい！」「ふしぎ！」「どうして？」と、気づいたり、発見したり、驚いたり、感動したり、試してみようと思ったり、得心したりするような機会が、日常生活の中にふんだんにあるような園生活を展開しなければと、願った。**わくわく・どきどき、魂の躍動するような毎日、それが、科学する心を育てる。**

魂の躍動する園生活が展開するためには、**直接五感を用いて、「見て、聞いて、触って、嗅いで、味わって」知覚する体験を豊かにすることが肝心だ**。そこで、「**原体験といわれるような直接体験**」を豊富に園生活の中に取り込むことを意図した。そして、**その「直接体験に絵本の客観性が加わる**」ことによって、様々な体験が整理され統合され、経験それ自体についても、その原因・結果や、ルール性や、秩序などについても、より確かに自分のものにしてゆけるはずだと考え、絵本の選択にも心を砕いた。

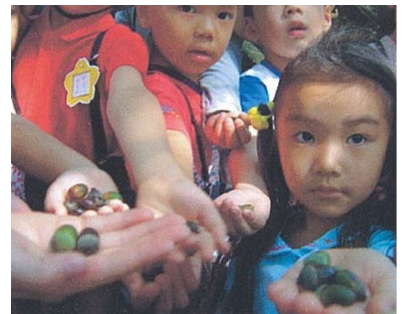
絵本を用いることは、読み聞かせという表現を用いるため、時として、子どもたちの活動としては、受動的なものと誤解されがちである。しかし、**絵本に見入り聞き入るといふ活動は、実に、主体的、積極的な活動**であって、子どもたちが主体的にその本の世界に入ってくるのでなければ、読み聞かせは成立しない。子どもたちの静かな魂の躍動が、びりびりと読み手に伝わり、そこに大きな共感の環が生まれるのである。

【活動意義】

いろいろな木の実やどんぐりに触れ、親しみ、工作したり、命のつながりや森の不思議を感じる。

【実践と思索】（本年10月と昨年度も実施）

Mちゃんが、「どんぐり拾いに行ってきました」と、袋いっぱいのだんぐりを持って登園した。丸いの、細長いの、大きいの、小さいの、くぬぎやあかがしなど、いろいろなどんぐりを持ってきた。折しも、「先生、どんぐり見つけたよ」と、園庭のすだじいの木の周囲から子どもたちが走って来た。小さなどんぐりを持って、「これ、食べられるんだよね」と言う年長は、昨年の経験から、もう皮をむき始めている。真っ白な実が見えると、早速かじって味わう。「ちょっと梨みたい！」。



届けられたたくさんのどんぐりを箱に移すと、子どもたちは大きさ別、形別、種類ごとに集め始めた。普段どんぐり拾いに行くく見公園には、小さい椎の実ばかりなので、他種類のどんぐりがあると工作などでもとても範囲が広がりが便利だ。

皆が集まったところで、『どんぐり』（こうやすすむ作 福音館書店刊）を読む。この絵本では、リスがたくさんどんぐりを拾ってきて、後で食べようと思って、土に埋めておくが、中には忘れられてしまう実があり、そうしたどんぐりの中の、ちょうどよい深さに埋められたものから、芽が出て、新しい木が育つ話が出てくる。リスたちは、自分でそうとは意図せずに地面に埋めて、知らない間に、森を育てている。子どもたちは、どんぐりを通して、そんな自然の仕組み・つながりの深さ、森の生命の不思議・連環へと誘われていく。さらに『どんぐりだんご』（小宮山洋夫作 福音館書店刊）を読む。ここではどんぐりを使ったさまざまなおもちゃ、こま、やじろべえ、にんぎょう、ネックレス、それにどんぐりだんごの作り方が分かりやすく描かれており、子どもたちはますます身乗り出してくる。するとSちゃんが、「お母さんが煮てくれて食べたよ」と体験談を披露。どんぐりは、3度も4度も煮て、灰汁を取ってからでないと食べられないことを、お母さんが作ってくれたことで、よく理解しているSちゃん。そして実際に経験したSちゃん

の話聞いて、他の子どもたちもより身近なものとして受け止めたようだ。

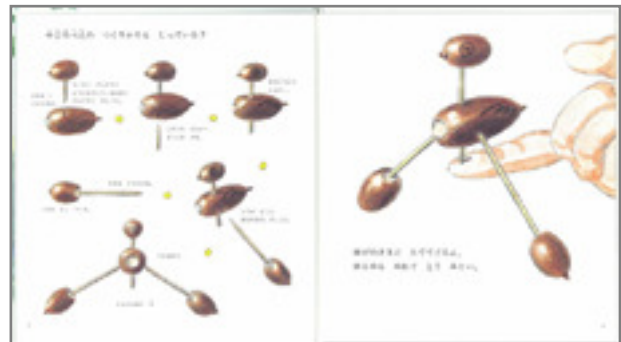
どんぐり遊び、どんぐり工作も始まった。「こまを作ろう」と、錐で穴を開ける。もちろん錐で穴を開けるのは、教員である。子どもたちは、どんなふうにしたらいいのか、どこにどんな穴が必要なのか、自分で考えて教員に注文する。コマにするための楊枝を刺す穴、やじろべえを作るための貫通した穴、「こことここと、」5つの穴を指示した子が作ったライオン。見事な作品になった。くぬぎの袴は、まさにライオンの頭！一つの取り組みから、アイデアが広がり、どんどん発展してゆく。くぬぎのどんぐりごまは、とてもよく回る。定番のドンぐリのネックレスやケーキの飾りや、次々と、遊びが広がってゆく。

【反省・考察・評価】

都会では、どんぐりの種類も限られ、園児それぞれが日曜日に家族で出かけ て大量に拾って届けて下さったものを利用してもらっている。そうした、季節ごとに、園児のご家庭が、いつ頃には何をと、準備しては、園生活における活動を支えて下さっていることは、本当にありがたい。一人の経験が、みんなのものにと、分かち合っただけで、とても尊いことだと、感謝している。それがなかったら、これだけ豊富にどんぐりも松ぼっくりも使うことはできないだろう。



『どんぐりだんご』小宮山洋夫 作 福音館書店刊
定価880円



『どんぐりだんご』P、9より

みどころ

どんぐりやまつぼっくりは、幼児にとって扱いやすく見立てやすく親しみやすい貴重な教材であり、子どもたちが存分に使って遊んでほしいと誰もが思える素材です。そのため、園で子どもたちが楽しく有効に使っていることが各家庭に伝わることで、このように「子どもたちのために、持って来ました。使ってください」と、祖父母の方々や地域の方々が協力して下さる、温かな交流に結びつきました。また、幼児が身近な人や絵本などから情報を得て取り入れる環境があることで、子どもたちの発想だけでは展開できない興味や活動の広がりが引き出されました。

さらに、どんぐりの製作活動で、幼児のイメージや考えた方法をことばで表現するようにしたことは、あやふやなイメージや考えをはっきりさせ、やろうとしている具体的なことを意識することにつながっています。実現できない「穴を開ける」という作業を保育者が行うことは、保育者との信頼関係が深まる場面でもあります。